

## 方丈記 第二回

私が物事の心、つまり物事の表や裏や本質を見知るようになって、四十年以上もの月日が過ぎ、いくつもの春秋の移り変わりを生きてきたけれども、その間に、いくつものこの世の不思議に、どうしてそのようなことが起きるのかと思わずにはいられないような出来事に、たびたび出会ってきた。

去る安元三年の四月二十八日には、風が激しく吹き、いつもならずすべてが静まりかえっているはずの戌時の頃だっただろうか、京の都の東南から出火した炎が、風に煽られて西北に向い、遂には天皇の住まれる内裏を取り囲む大内裏の正門である朱雀門、天皇がお仕事を為される大極殿、官吏候補生たちの学舎である大学寮、はては民に関する諸々のことがらを取り仕切る民部省にまで火が及び、それらを一夜のうちに燃やし尽くして灰にしてしまった。

火元は、樋口富ノ小路の、舞人などが泊る粗末な仮の宿のようなどころだったと言われているけれども、ともあれそこから出た炎は、あちらこちらへと向きを変えて吹く風に煽られて、あちらこちらへと燃え移り、まるで広げた扇のように、末広がりに、どんどんと大きく燃え広がってしまった。

炎から遠いところにある家も煙にむせび、炎に近い場所では炎が地を這い、地面をたたきつけるようなありさまで、空には灰が吹き上がり、炎が放つ火で空は一面紅く染まり、強い風に吹き取られたような炎が、飛ぶようにして一町二町先にまで燃え移り、炎が燃え移った家の人々が正気をたもてるはずもない。ある者は煙に咽せて倒れ伏し、ある者は炎にまかれてたちまち死に、ある者はかろうじて、身ひとつで逃げるものの、資財を運び出したりなどできるはずもない。七珍万宝、ありとあらゆる宝が灰となつて燃え尽きた。いったいどれだけの富が焼け失せたことか。

こうしてこの火事で十六軒の公家の家が燃えたが、もちろんそれ以外にも燃え尽きた家は限りなく、どれだけの数の家が燃えてしまったかは誰にも分らないけれども、どうやら、都の三分の一が焼けてしまったという。

死んだ男女も数知れず、牛や馬などの家畜に至っては、無数としか言いようがない。

考えてみれば、人の営みというのは、たいがい愚かなものだけけれども、こんなふうにあつという間に燃えてしまうような家を都じゅうにつくり、資財を費やし、そのことに、なにやかやと心を悩ませたりもする。そんなこんなも、こんなことになってしまふとなれば、これ以上に、つまらないことなどあるだろうか。